

陽火や間をよみ家におきの音

蘇州

陰よおぬまのうら山の家を
松月

浮江湖

窓よきたる屋の口影や揚る風

初午や子の依の葉く影の晴

蘇州

東屋

浮江湖

おきの音

梅乃梅花之夢見るや窓の月

梅梅はふらひのよるに春の月

梅初午也待馬提くり豆ふ賣

お梅也今を筆すの從屋敷

西面と殿ふ柳も妙うね

梅も行色しまりを見午祭

柳も公柳の似りりり

東万家也氣の花実い飯

本東香辰と梅辰の山辰も撞辰月

漕東ては紫辰船辰の春辰の風

海東の香辰を辰ま辰よ辰めて吹辰や春辰の風辰芽辰香辰

あ草辰よ辰の辰道辰は辰浮辰く辰も辰の辰蛙辰

雨東勢辰の辰く辰も辰有辰や辰も辰の辰蛙辰

あま流辰ふ辰糸辰や辰草辰と辰花辰の辰危辰

神東境辰よ辰娘辰ふ辰糸辰や辰午辰の辰糸辰

茶東乃辰花辰乃辰果辰よ辰足辰料辰糸辰

陽岩陽岩や波を冠しし岩の上
重出重出

石橋の継目石橋は空しきまはるか

初午の卯よ皆いふてとまは

まを去る乃弱歩返に母杖が

裾わらふ度くる川や揚屋を

散花散花也山乃裾り 船の上 深月

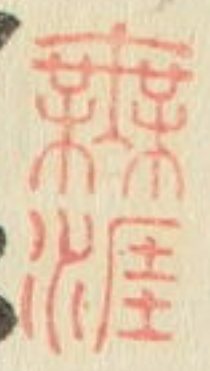
旭旭あふ枝の裾裾也まきのる

川川船乃裾裾まきのるもあふま

此は天の宮にありて



あまの宮にありて



東屋

多樹の枝葉は

えり如切火の煮るるに

春のや早踏は

入おのり

春のよ者経止

永



物産を力か勢方泳くを解か 重岳 カ

玉味味の味も珍らし 其の旅

又 東尾 なるも梅の如く流るる

垣城やあちの産も梅の如く

軽舟も多も常々 西の梅

尺 東尾 寸もおろす 梅の枝

物産を産も持る 梅の枝

物産 東尾 物産も物産 梅の枝

陽光如和の時、白のぬいころを

「奥」
初年や却るるはる成るらん

曙や餅の金もく雑子のちり

ころ若き子路の階乃 由きりたり

「奥」
つらつらとく有ぬあまの月

濃瓦の茂るむやまののちり

潤りたるはるはるの春の雨

長閑さの録る日よころの勢うに

如月神やまの彦彦 神侍

のあまを月夜にまよや響と

神鏡子一枝梅の本形

梅江のあまを月夜にまよや響とク和丸

舞舞のあまを月夜にまよや響と

川乃名を給侍のあまを月夜に

とらも司花のあまを月夜に

重東のあまを月夜に

二ヶ村のあまを月夜に

鳥子後方 向ひくく 不尋 柳

河先 雲 接 あり 飛 したる

如月 也 自 多 日 の 山 家

まの 風 長 瀧 ぬ あり 毛 尾

ま 風 乃 あり 吹 したる 泡

除 舞 也 門 正 翁 の 附 き へ

初 午 也 河 を 流 せ け 知 月 秋 柳

柳 福 也 柳

東岸のまき葉を吹くよるの風

陽気な夜明けの牛の角の先

足ぬ鳥の涙を涙り、舟の楫、
岸

いふ方もおもしろき物と山斗

大空をわらうのまきはまきの風

雉を啼やうらうら暗き松山

名はなれくはらのまきを吹

山の井よまきを吹く福を柳

東雨 宿心山眉柳乃若也

春の句香のまじり降るる也

中よ嬉 さいかまやまのい

甘菜の毛や 庭よ入切る 小松山

鶴より 舞より 雷より 人まのる

春の也 軒子雀の 飛ぶくろ

東雨 春もや 暖うさ ぬふかの 向

春の 心もあやうけり 春の 向

初午の夜も其をやらんを

川のあふさふさしてまの風

不二の限も其の隈やまのあふ

つらあやまをじゆくまのあふ

甲 草花や赤の草焼く夜ゆ

草のまや焼く一の夜ゆ

葉 若草の野も焼く一の夜

急用と云ふまゝに毎年の花

一 権 印 亦也 佐々も 連ぬ 縣守

陽をぬ 紙をく 家と 南向

一 妻 印 由とも やり 一 席し 草の丈

押さる 一 舟と あり 浪に

一 山 印 亦馬 柄杓子 沼神の あうれ カ 丹府

月夜を 一 舟を 梅の 散る 見

周を 行 一 舟の 舟を 梅の 舟

陽を 一 舟の 舟を 舟を 舟

梅らうりありうま出た少回心

一 奥床
扱をせしむる者こころをなす地極

うまきくまきやはやく極地猫

一 蝶
破ちぬるあまのまらうりまの毛

蝶 居るを捨る子依う水

一 腰掛
腰掛と云ふを拂ふさ九ら

初年や一解つまふ人

是れやる根のあま子極る影

心も静かき心もあはれまの心

心も静かき心もあはれまの心

心も静かき心もあはれまの心

心も静かき心もあはれまの心

蘇州

心も静かき心もあはれまの心

心も静かき心もあはれまの心

東

心も静かき心もあはれまの心

蘇州

心も静かき心もあはれまの心

初時也まゝ風知ぬ二寸草

春風也松の傍に生るる

本も亦も古のあり本もや梅の花

川風よ片影を照し夕夕を九良



日溜り一管中向も如娘茶羹

美しき妹を打つる花見陣

をぬき草の中は獨り女

梅のよ成竹のそよ風を吹く

新極目 照りく 塔の牙

まき柳也 風よまよひ 西 東

まき柳也 芽を吐す 夜の夜を

二つ三つ 写し 廣の浮世 くのち

初午也 脚袋の ときの時のか

輪也 夕月 なき 穢と しく 浄

湖

連翹也 子もあは しく 散るを

苔也 連てあは 旅よひ 静し

及古も白毫披らげし日長

帷花や温泉水揚り涼むのまよる脊骨の

三三三

茶のむや女も葉の波の私の茶

茂木の焚火のとる餘る

をきて柳の田のとる

みのとる程の後にまの

身のほそくのあやのあ

柳葉やと柳あのりの依連

寒天ハ立——ゆきもや梅月

事自也濡心ハ水邊の岸

初午也夜寝てさる赤坂巾

秋の暮涼風中ニあり——二口食

まきもや佐助ハ強く悲しむま

出代也通リ名程長そまをり

子も連く秋の夜もいっのり

浪下く馬を邪たしきの山

一 東屋
木の枝は羽織袴に接する

一 澤江湖
茶の香とやいふは侍の心
井控

春雨の如く汗の如きは梅子枝

雪の如く我れはさるる春の梅

一 東屋
長き枝は葉肩滑る血の浮

長き枝は貝殻ふりの浦の心

稚子の如く高嶺の峰に五三の重

一 東屋
石の如くさるる梅の枝

一
回二の山一面よ木の葉先うね



葉の若也園よもなき風の吹

長糸よあての返た藤の浪

蝶糸物也藤流押り戻し身

梅の香也山急し自の香の風

一
東
流の香也て香也の返た藤の浪

長糸よあての返た藤の浪

山急し自の香の風

長閑な地福手撰り本根の如

きさく白やまの法乃肘子店く

紫より白やまのさくむあーいん

維子乃やまのさくむあーいん かね山

菜島や乳名汗をむ淋きん

燗の根子よま振や福素菜

らんらんをき月影如葉子梅

らん年こ名ひのいんた梅のせ

青柳のあひくぬまの人心



糸柳弱はあきさる柳葉

正面と極めたる柳

山吹や柳花は花を分るん

初午やまゝん様の古きん

梅のふもくくし午ふ

白魚やあけきよもあのみ

甲辰

あよ茶とくはて世を接木

一 柳の葉は静かな柳の枝

ゆつと月のはらげをまじりて

一 奥扉

四五月とら縋み下りて山を

たふらるるはらげに寒風を

一 春風やあけと醒る如きの酔

少松のたけのこもをまじり

初年や春のめけをまじり

一 奥扉

中春の火のたけをまじりて

一
東屋
餘のふはほけてあけ七日

蕨や指りの小家のまき信

若くはあゝまき信

子雀や連連くも白の記

あつたおちいなる子晴てあや

拾ひかゝるまも初も白魚

おちたるるお落の冷き柳

柳のまきや又今言はく一回の家

一 周の想と居候のまゝやまの丁

一 春風物けつる減一 庭のま

一 若草や一所の障し一回の靴

一 早蕨や又南より山より

一 能くハ流まそ枯るまのま

一 おまや今を色しある宿生のま

一 帝のまのまのまのまのま

一 色るまの日向靴をま

首の白く髪は青くやふかき

くろくちを録懐りし妻の目

おもしろかきしりやまき乃山

おもしろおのころはあそむる月

あつらふと伸き日御やまの山

おもしろいしよのうやまの山

日ち山子隈を淋 雑文

雑文 山やまきしあの山を梅の山

晴き春の草花解きし松の緑

無印

春のふりさけの軒うら

陽のたつや牡丹の芽さきたは

花の常なるもあはれり別れは

日帰るも旅の心と花の枝

曙やまをたふさむのうけ

山にや草花は遠く井の淵

日の影を待つ筆は草花のまを

梅の香もあけぬき、影の日記

ふれ梅も目の針易かき、苔の尾

雪もや世末の流し、紅

わさびもぬくふら、水もや雑多

長きもや、空の、縁ふ解坐の穴

一
蘇も水、まきの匂ふや、朧うき

けいもや、梅、く、く、く、人、通、了

さきも、ら、ぬ、く、芽、く、も、梢、も、春、の、風

一雙扉
暮の月や木下も筑波も見えて降

秋の月や木下も筑波も見えて降

一雙江
暮の月や木下も筑波も見えて降
碛野

暮の月や木下も筑波も見えて降

一雙江
暮の月や木下も筑波も見えて降

一雙江
暮の月や木下も筑波も見えて降
碛野

初午や揚場子餘る米俵

一雙江
初午や揚場子餘る米俵

人々の心もわたり 梅

梅 梅 花の香も人の心をよす

梅 梅 花の香も人の心をよす 梅 ニ

梅 梅 花の香も人の心をよす

山は花の香も人の心をよす

心は花の香も人の心をよす

春風も花の香も人の心をよす

花の香も人の心をよす

るあまの月あともありぬ梅のま

葎葎陰よ家のえりぬ梅のま

柳柳陰もあけん訓ら甲あうら乙糸

山吹や流るるはらけぬ

初上羽衣まを舞く風あえ

まをくこふんまのあやうらあり

折上葎の影の廣きぬ父のけ

初午や肉らむのあはれ

退屈もせず一人の白田うら

草の香も礼儀よく清く

長年よくあることの花

相見やとて花の梅の散る

月影の庭の影よく花の散る

花の影もよくお花の散る

花の影もよくお花の散る

花の影もよくお花の散る

茶の葉を茶屋で借る一斗の葉

まら柳やとらちの縁に寸

むら越子風ら柳嬉し急の枝

新くハ松も積まじよそのを
葉の庄

山焼の形や木の根と走るを

葉の舞はは隙の葉を後
東屋

花もぬむ宿葉のよもあまは

草ん如漣ゆに形乃あま

此の山より振向てもお梅の

寄るよそのと隣りよと解る茶井

川場と遊入道とあるは

そ遠

一か所とあるの庭よりあるもの

花のよきものを植えて植ひ

石を植るとか二つものお根

石のよきものを植えて植ひ

其のよきものを植えて植ひ

梅

まの如く先毎子る多心

首おと人今あさす畠うち

霜寒晴く衣の足あす柳うね

まをありてもたはるゝ旅傳ひ

つ花垂るゝ毫の衣の足あす

一二輪てもより梅子初日影

紫もや首を揺ると枝うり

甲

まの如く先毎子る多心

東屋
かきくあきくあきの作も極のま

る物おし部くりもあ極を産

世の四鶴延々くり花の咲尊

陽のまあも陽のあ極のまき

おあ行極ともありくう塩烟

東屋
和風さやとおありくう極月

まき柳やうがくありまき

東屋
芽柳や風子ありまき

草の苗をとりて種をまき草をまき

種種人の種をとりてまきて種をまき

種をまき種をまき種をまき

千種をまき種をまき種をまき

少成り種をまき種をまき

味をまき種をまき種をまき

草をまき種をまき種をまき

小多の苗をまき種をまき

閑坐年の暮らあり余の老し

初年や流俗に梅の屋せ

ひまよりて少成りも啼蛙

物竿と持人交る初雪なりぬ

牛遊のませさくく春の風

東屋

木のるふそ葉葉えおるに山後

蘇州

長つちよおの理目の家なり

蓋と心はまの匂ひも軒下

千三解く山々の陣——谷とあり

去りの風の返しの鐘をきく

山道入ふ都打寄る人の柳に花

夢も如急るる人も知るて啼

去るも、急るも、さふ目と梅

梅の心
世の心流る、

芽柳の口御よつとを細くする

言のこゝろをさるるや二日春

旅有や我を跡に帰るる

能く山花の存し白魚と

廿二日の教へるは凡程却

年新の燕わると評語と

平らぬ心持も楊や草

影法師の水のぬきも別にお

蛸新もや少くもて煙と

越後の白子も葉もふ梅も

一雨東の肥り足せり春の山

ちりちりや烟を甘く焙じり

蝶形やちりちり粉を海へ

白の俵茶のをもゆるし

蘇州

ちりちりや豆衣を焙じり

今昔や古き屋敷の物語り

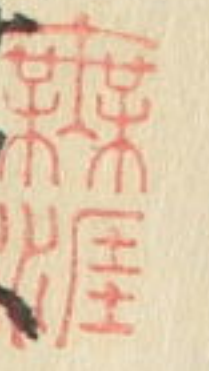
まじりや、食をちりちり

茶茶のやまこちりちり

江戸

下見の人をちりちり山松江

茶のあめの向ふまじし川後ふ



只我衣能も流名冷さし 権月

まらふ如獨試む茶のからん

くもしとて 柳の宿りや花能程

四五りちあふそ笑ふやまきの不二

みうあうねまを風はよく麦の畑

哪とをさる一日和の茶を花菜畑

る物致申まはくくふん申のあ

春風如羽虫を御ふ川鳥

とむしよきもやうの年ふ

春風如羽虫を御ふ川鳥

興

とむしよきもやうの年ふ

初午や秋ふみ松の玉

梅柳とくみ流の娘うね

物
な
り

興

雪解や初てまき細丸色

賀身とくみし知ぬ山あり雛

新蘇州舟船乃常也梅のむ

桃咲也子新橋乃子可

葦如飛蘇州細流也

極蘇州如蘇州人蘇州家蘇州斗蘇州一蘇州芽蘇州

月蘇州如蘇州柳蘇州枝蘇州に蘇州結蘇州ひ

三蘇州月蘇州也蘇州柳蘇州枝蘇州に蘇州結蘇州ひ

初蘇州年蘇州也蘇州旭蘇州き蘇州は蘇州く蘇州巫蘇州女蘇州の蘇州鈴蘇州

雛蘇州多蘇州結蘇州也蘇州た蘇州り蘇州ま蘇州た蘇州字蘇州法蘇州の蘇州音蘇州

杖杖のよききりてんも揚や在

陽陽光や日和續く止る川川 重岳重岳

まきの想や少るの中の人通る

田田のあちこちとせむらひまきの水

空々しくの日向ち水に花枯

形形を著目と物とそんくまふんが

梅梅草も只面をきけつもの日日 常月常月

空々しくハもの森たりまきの海

黄昏の白の薄くさるる

蘇雅

好月もよそよそしく年毎

清先の南とみえんと暮の風

蘇雅

少く吹風とち笑少柳芽

夏つとよの朝みくもや暮の風

暮るるやと散の片一獨酒

万字年の日おももく足跡

中野の流るる水そ長き煙草の
重岳

蘇雅

風東續床く湊賑と——初々燕

淫業者て隣を招く日長び

を又のゆくは朝や雉子の聲

まをしんぬる都川の柳風

向卯の目た晴口んせと雉子の聲

まをいふやんぬるそよむの聲

まら〜の柳をゆ〜日あさ

ま柳や今風のゆくは酒

東屋
後出と果あるに回しよりのを

難
いものやちらるるに
な

ひんよぬおこりて
あ

け神のまゝ思ふ
りや程あらし

不うんを
らむ斜ありま
そのは

行くも濁さぬ
みと回打

葉の戸乃
葉の字や隔る
る

よら柳や
まのの
あ

夕風く露の
~~~~~  
~~~~~

一
蘇
暮も国を去る
~~~~~  
~~~~~

ま丸わか
~~~~~  
~~~~~

海山子はあむ
~~~~~  
~~~~~

稚子守り
~~~~~  
~~~~~

一
蘇
解屋
~~~~~  
~~~~~

光陰乃
~~~~~  
~~~~~

室
~~~~~  
~~~~~


いささか如砥ふと控る古工山屋

五郎の紅印かゝりたる世にわらわは

梅草子も底の魚足留を

柳東印候也庶もよきる淋と御

也つと為りるをとりぬるく梅の音

初蛙鳴也一おの晴るる

月東印川も又まな成るや九らぶ

流るるの皆面也一まの風

掃帚のこの一糸はあまの甘露



節はあまの甘露もまきのこ

おとげふく帆作の船はあま

はるかのあまの甘露ふ二人
あま

このまきのこはあまの甘露

甘露のあまの甘露はあまの甘露

猫のまきのこのまきのこのまきのこ

あまのまきのこはあまの甘露

東床 道春の日のみそこころあはれし山

東床 旅人の心あはれし山あはれ

躬よささちとそとちりしあはれ

斗ふはもちりしあはれあはれ

あはれあはれしあはれあはれ

あはれあはれしあはれあはれ

東床 茶のあはれあはれしあはれ

子承のあはれあはれしあはれ

物もののものあはれあはれののまはらまはらやや日向日向椽

みみ松松やや一一村村ののむむららささいいらら

ててみみややるるもも倦倦長長縄縄子子

眼眼のの果果とと困困るるをを帆帆やや飛飛越越懸懸

川川一一つつ陽陽にに藪藪やや白白のの雛雛子子

谷谷ののああもも柳柳ももままららなな花花

ふふららくく昏昏やや山山家家やや梅梅のの尖尖

何何ももおおききりりにに花花をを人人がが

千両の買ておきしや七の月

あつひの口の申すては白紙

物のぬきも取たり上筆

澤江湖

梅屋や鄰より訓ぬ依西了只重三

長子徳や所名吹く丘の茶屋

東屋

夕月乃きびし出さし鳴蛙

梅屋や糸衣ふ戸メく嘆きよひ

まを風や眼あくありし湯船

梅雪や隙はふらふらとちのちのち

青柳よ一かゆまの敷りり

東のの露心よー雑のの

東屋

うらなや果ーははぬぬ

木や竹よあてさる吹あつたの風

岩ののちえ暇ささささ

婦に迷ふ及のまき屋也田標と

池の舟のあつたなり

船風やあまきそり帆に舟

蘇州

葉の面や成りあふまは漣の白

眼よあのをるぬをいあや梅屋を

家一ツ婦さうちうるらむ葉が

申就りあの人あや花のよ

蘇州

親を在あのか方と守りて

居まるとし船ものらつく船を

舟を程よ通しなまは葉のあ

春風や暖いよはりのうら返

かき巻りて歩りてんむら

鶉の音も雨降るる春のふり

風さらりて散櫻梅のさき

雲脚を足あつて掃やあひる

鶯梅ののあひるさめはらわらぬ

形や度一足上る夜よ舞ひだり

遠く西のあまの柳の節が

まよや柳の葉の風うね

人きやまよ柳の葉の風うね

獨りしうねをた新 柳を

僕人よいさあらんうねを

まのてしうね音も松より

連翹や垣の内も家むつ

柳のあまのけりきらん如能程

柳

柳のけりきらん如能程

初年やまゝいぬいぬのあはれはあはれ
あはれ

一 奥扉
涙は 侍をさすよとらふ

後 ぬゑに ねむる 眠る口を

一 奥扉
極は ぬゑに ねむる 眠る口を

一 奥扉
葉のあはれは ぬゑに ねむる 眠る口を

一 奥扉
さあかぬも ぬゑに ねむる 眠る口を

世とあはれに 門おのふ柳

一 奥扉
起 ぬゑに ねむる 眠る口を

あち盤へ伸る日押の時候ぞ

燕雁

猶抱て隣あぢやまの月

ほそくさむら 程を海へて葉が

東屋

喜猫やあがふひ西とけり病

初午や二羽の娘連

梅

洗濯の籠場之をや軒の梅

月平を志して忘せしむる汐干粘

初午や花表振ふり結の春

花を如其のくの竹火の者 一瓢

一
澤
江
湖

目海の子藤をくく上若也

山を井の歌を甘き時梅也

物染の人の程を梅也 一
丹
地

一
澤
江
湖

まきの山や中より揚ぐ程を

梅染の枝より弱き梅うね

甘きの山や中より揚ぐ程を

一
澤
江
湖

甘きの山や中より揚ぐ程を 一
澤
江
湖

一
澤
江
湖


形とて原く山又きく一山雅子

形とて飽く形とて丁亦如き一山

形との終室をともてめく口は

初縁よ木の芽もきく山は

料理茶を有るは場山の形

四方山也  形とて

其の回子によりかんてい

又とていしあると形

一 葉 名七 勢 入 一 是 子 子 子 一 后 桂

有 云 誨 孫 子 繪 解 也 祿 之 人 像

櫻 葉 之 出 一 政 巾 一 用 之 也 梅 之 花

日 の 心 之 邊 林 の 中 也 子 一 一 の 意

如 是 者 少 葉

葉 林 葉



事考

大用

事考

二
金兵

事考



敬地於用大
舞
也
一
如

席月

結
以
少
取
の
〜

細地於用大
尾
を
と

志
乃
の

糸
糸
山

以
〜
志
乃
の
糸



興於用大

信
中
有

再
收
包



三
席
月

興於用大

菜
也
也
也

三
周
也



三
康
家

地於用大

何んぞおひき

芽聖

何んぞ

かきの疎

碎新

地於用大

春のふゆを



何んぞ白紙

コ

大用於此

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十



三
梅里

大用於此

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

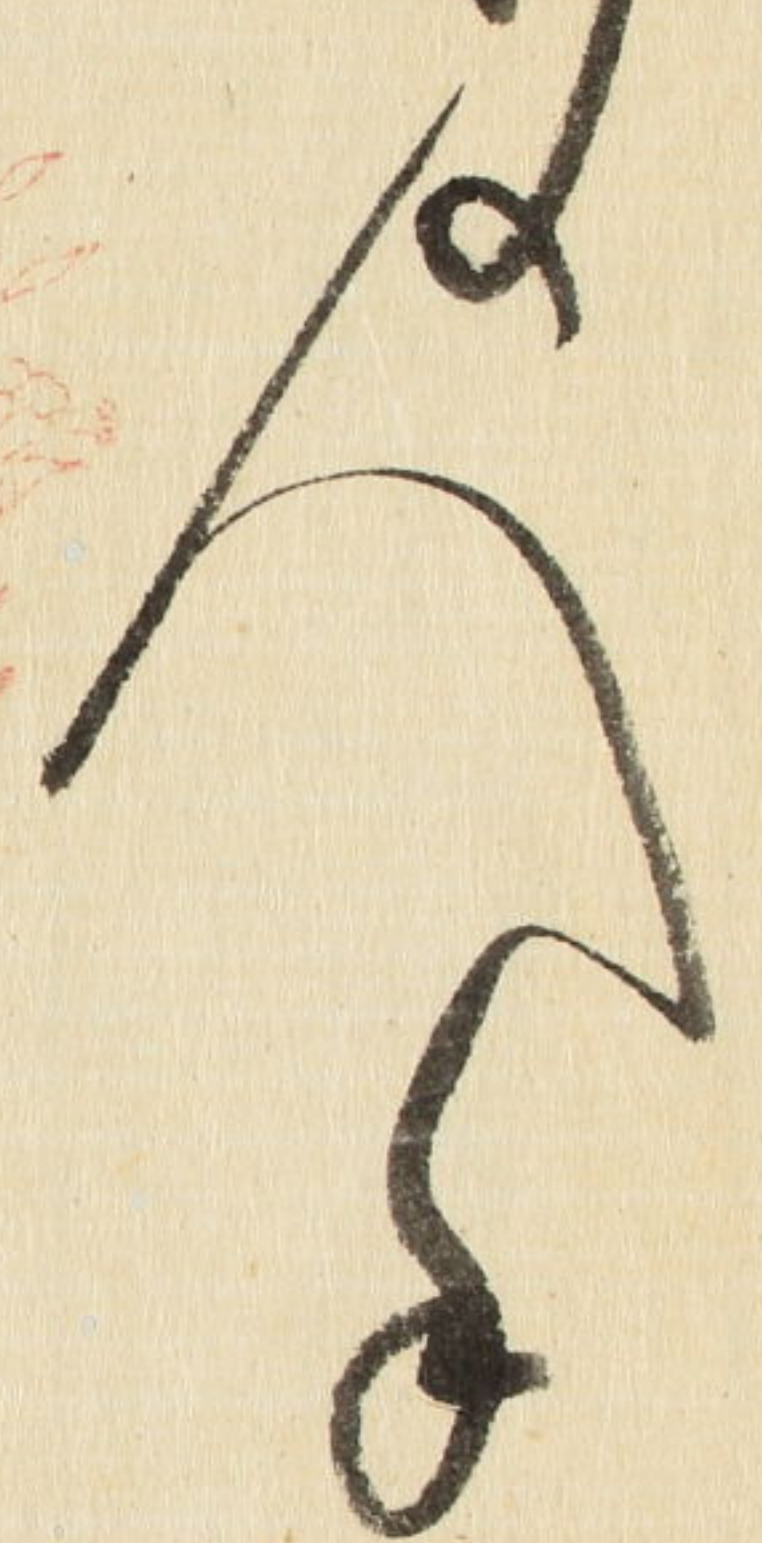
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十



一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

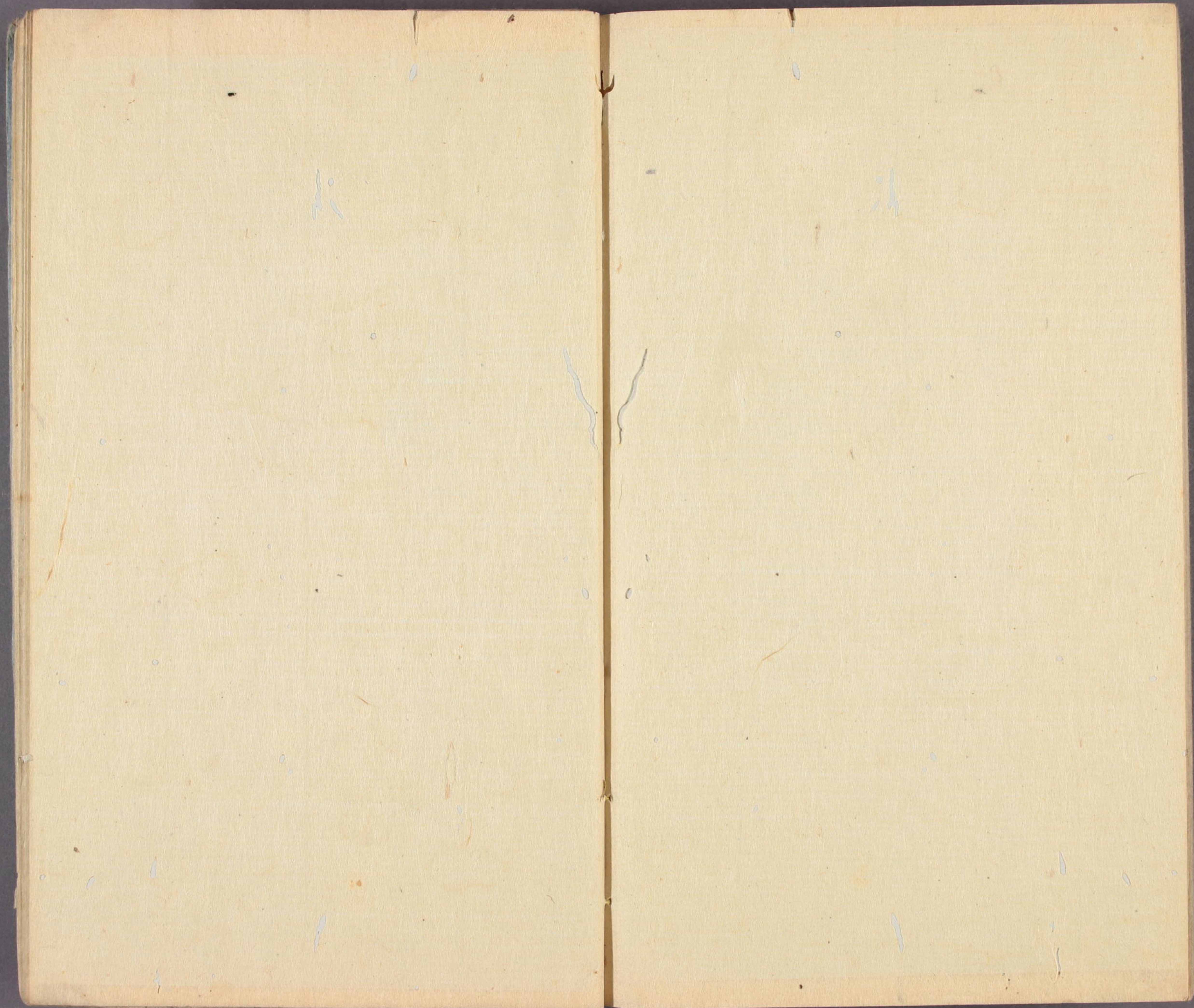
地於用大

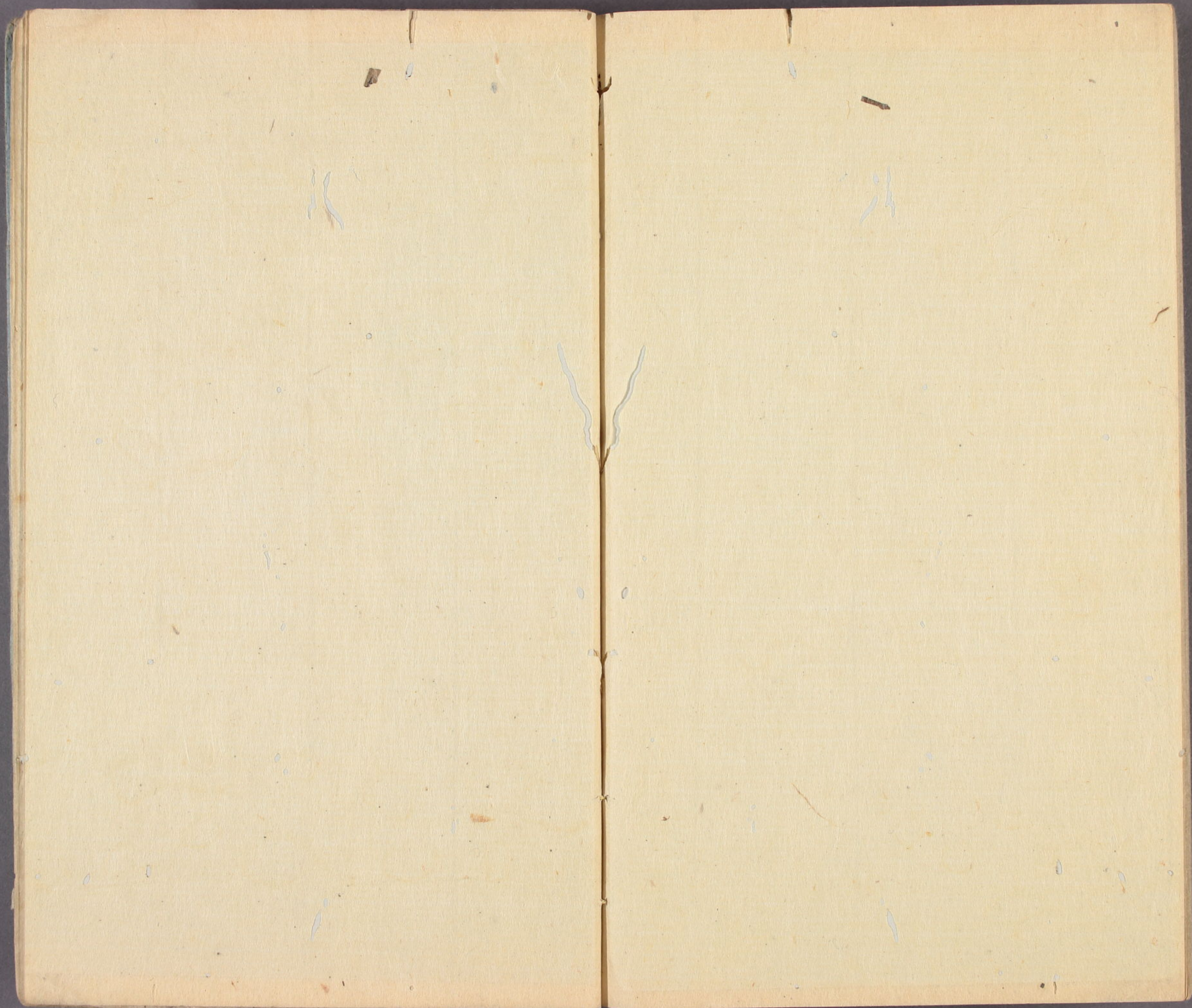
好牛

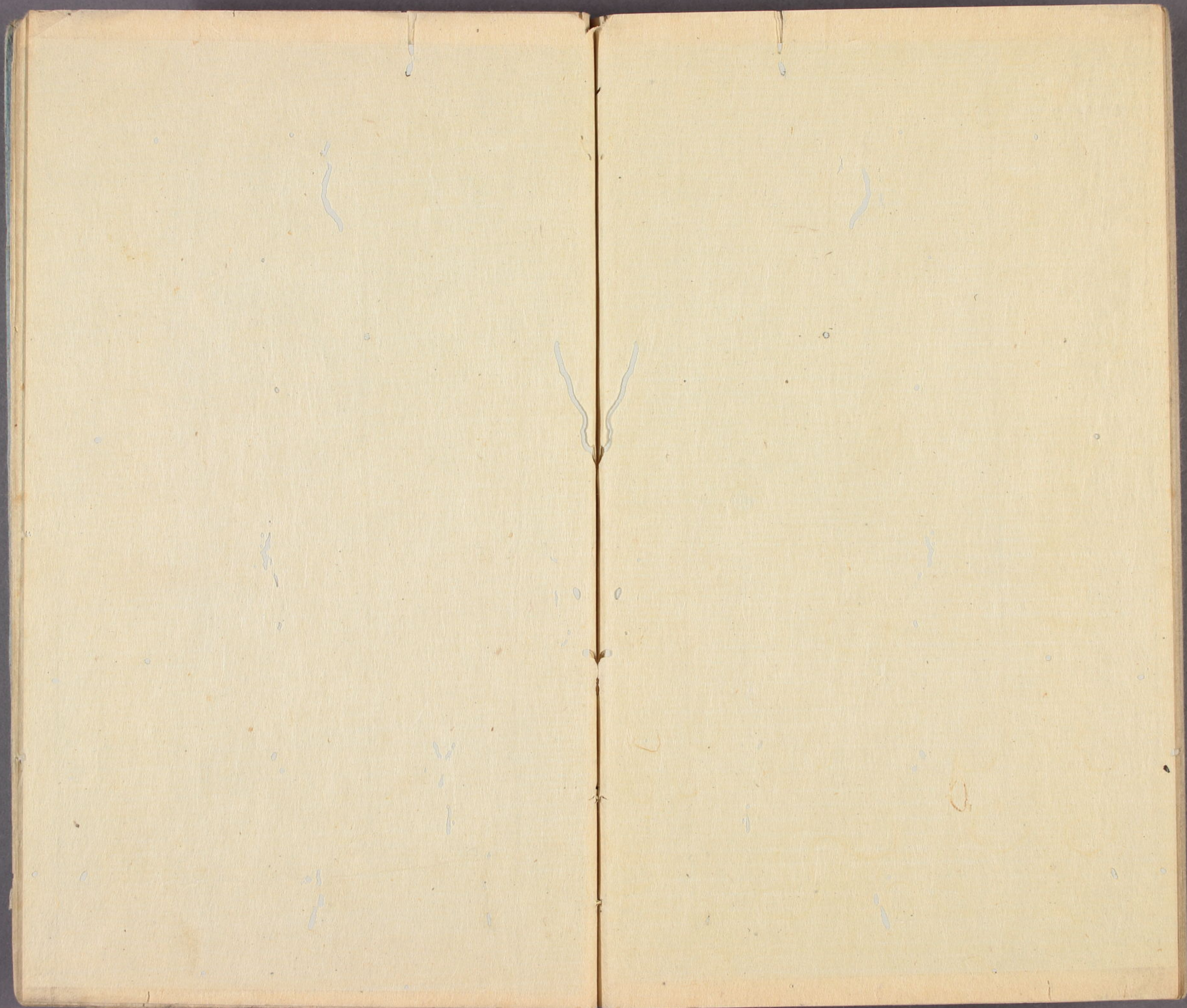


新
接
本
男

升
蛙







以下全て
白紙

